

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第57回新潟消化器病研究会

日 時 平成5年2月6日(土)

午後1時より

会 場 新潟市民病院

(南講堂)

## I. 一般演題

- 1) マジックリン(次亜塩素酸ナトリウム)による腐食性食道炎の1例

伊東 浩志・松田 達郎  
 畠山 眞・坂井洋一郎  
 羽賀 正人・安達 哲夫 (新潟医協下越)  
 山川 良一 (病院内科)

症例: 86才, 女性. 1992年11月14日, 自殺目的でマジックリン(次亜塩素酸ナトリウム)を約200cc飲み, 嘔吐繰り返し, 同日当院来院. 意識清明, 血圧正常, 血液検査で, 白血球増多とCRP上昇が指摘され, 胸部X線検査から縦隔炎が疑われた. 入院後, 絶飲食, IVH管理としたが, 第20病日頃より食道つかえ感増強, 食道下部にpin-hall様の狭窄が認められた. このためCelestin-dilatorによる食道拡張術を施行し, 自覚症状的にも著明改善が得られた. 腐食性食道炎は, 酸とアルカリにより, 障害部位, 障害深度に差が生ずる. 本症例のようなアルカリ性物質では, 食道狭窄をきたしやすく, これらを考慮した注意深い臨床経過の観察が重要と考えられた.

- 2) 特発性食道破裂の2例

飯利 孝雄・小柳 佳成  
 畑 耕治郎・月岡 恵 (新潟市民病院)  
 何 汝朝・市井吉三郎 (消化器科)  
 片柳 憲雄・山本 睦生  
 斉藤 英樹・藍沢 修 (同 外科)

最近当院で経験した特発性食道破裂の2症例を報告した. 本疾患は頻度は比較的に少ないものの, 外科的治療を必要とすることが多く, 診断までの時間が長いと予後不良な疾患であるため早期診断が望まれる. 早期診断のためには本症の可能性を念頭に置くことが重要であり, 当院で経験した2例とも年齢, 性, 発症様式は典型例のそれと一致していた. また, 臨床所見, 画像所見を注意深く観察することが重要であると考えられた.

- 3) 食道静脈瘤に対する内視鏡的結紮療法の試み

—緊急止血例を含めて—

何 汝朝・飯利 孝雄  
 小柳 佳成・畑 耕治郎 (新潟市民病院)  
 月岡 恵・市井吉三郎 (消化器科)

近年, 内視鏡的食道静脈瘤硬化療法は広く行われているがそれに伴って硬化療法の手技や使用した薬品による合併症の報告が増えて来ている. 我々は昨年よりStiegmannらが開発した内視鏡的静脈瘤結紮術(EVL)を取り入れ, 今日はその使用経験及び問題点につき報告する. 症例は男性2例, 女性1例計3症例. いずれもChild Cの肝硬変症で, うち1例はウルソン病, 1例はステージ4のAIDS合併例であった. 効果: 症例1, 28才男性. EVL前はF<sub>3</sub>, RC(+++), Lg(++), EVL後ではF<sub>1</sub>, RC(+), Lg(+). 症例2: 42才男性. F<sub>2</sub>, RC(++)->F<sub>1</sub>, RC(-). 症例3: 73才女性. F<sub>2</sub>, RC(++)->F<sub>0</sub>, RC(-). 以上少数例の経験からEVLは食道静脈瘤の治療に有効且つ安全な方法と思われた.

- 4) 食道静脈瘤に対するEVL(内視鏡的静脈瘤結紮術)治療の1例

朴 載広・佐藤 知巳  
 塚田 芳久・本山 展隆  
 丹呉 益夫・伊藤 信市  
 船越 和博・早川 晃史  
 上村 朝輝・朝倉 均 (新潟大学第三内科)

症例は肝硬変, 原発性肝癌の58歳の女性. 昭和61年に食道静脈瘤が認められ, その後増悪傾向がみられた. 今回肝癌に対し抗癌剤注とTAEを施行し, その後食道静脈瘤に対して硬化療法を開始した. しかし2回施行後も効果がみられず, 難治性静脈瘤と考え内視鏡的静脈瘤結紮術を併用した. 結紮した部分の静脈瘤は消退し, その後1回の硬化療法の追加のみで治療を終了した.

EVLの適応には静脈瘤径など考慮すべき点がみられるが, 治療期間の短縮, 硬化剤の減量などの利点があり, 今後試されてよい治療法と考えられた.

- 5) 大量吐血を主訴とした脾臓癌の胃浸潤の1例

小柳 佳成・飯利 孝雄  
 畑 耕治郎・月岡 恵  
 何 汝朝・市井吉三郎 (新潟市民病院)  
 笹川 力 (消化器科)  
 山本 睦生・丸田 宥吉 (同 第一外科)  
 岡崎 悦夫 (同 病理)

症例は53才男性. 吐血を主訴として緊急入院となり緊